



営農タイムリー！



発生予察情報について(8月)

2022年8月1日発行

病害虫発生予報第5号(8月)

京都府病害虫防除所より、8月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第6号(8月) (抜粋)

作物名	病害虫名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
イネ	いもち病(穂いもち) 紋枯病 セジロウンカ トビロウンカ ツマグロヨコバイ 斑点米カメムシ類 コブノメイガ	多(並) 並(並) やや少(やや少) 並(並) <u>やや多</u> (多) <u>多</u> (多) 並(並)
ブドウ	べと病	並(並)
カキ	炭疽病 うどんこ病	並(並) 並(<u>やや多</u>)
果樹全般	カメムシ類	<u>多</u> (多)
果菜類	うどんこ病 ハモグリバエ類 アザミウマ類	やや少(少) やや少(並) 並(並)
キュウリ	べと病 褐斑病 炭疽病 斑点細菌病	<u>やや多</u> (<u>やや多</u>) 並(並) 並(並) 並(並)
ネギ	ネギアザミウマ ネギハモグリバエ シロイチモジヨトウ	やや少(並) やや少(<u>やや多</u>) <u>多</u> (多)
野菜全般	ハダニ類 ハスモンヨトウ	<u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (<u>やや多</u>)

イネ

1. いもち病(穂いもち)

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
- (2) 穂ばらみから出穂後約3週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- (3) コシヒカリなど発病しやすい品種や、すでに葉いもちが多発している田、山間部などでは特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- (4) 粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (5) カメムシとの同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に散布する。

2. 紋枯病

予報内容 発生量 : 平年 並 (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 早植栽培で発生が多く、気温30℃前後で多湿条件が続くと多発する。
- (2) 例年発生の多いほ場や分けつの多いほ場では発生が多くなるので十分注意する。
- (3) 昨年多発したほ場では、深水管理をしない。
- (4) 出穂20日前の発病株率が20%以上であれば薬剤散布を行う。散布は発病部である葉鞘によく付着するように株元を狙って行うようにする。なお、穂いもちとの同時防除を考慮する。

3. トビロウカ

予報内容 発生量 : 平年 並 (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 海外からの飛来害虫であり、今後発表される病害虫発生予察情報に注意する。
- (2) 株当たり5頭以上もしくは短翅虫を10株当たり2頭以上認めた場合は、直ちに防除する。
この場合、薬剤が株元に十分かかるよう散布する。

4. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 穂ばらみ期から出穂期に高密度であると吸汁による被害が生じる。また、排泄物により、すす病が発生する。

5. 斑点米カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類がいるが、近年、カスミカメムシ類による被害が増加している。
- (2) 水田周辺のイネ科雑草の穂を餌にして増殖し、本田へ侵入するので、草刈りを行い、イネ科雑草の出穂を防ぐ。
- (3) 草刈りは出穂2～3週間前と出穂直前の2回行うと効果的である。1回で済ませる場合は、出穂10日前までに行う。なお、刈取り時期が遅れると逆効果になるので注意する。
- (4) 薬剤防除を行う場合、粉剤や液剤では穂揃期と傾穂期の2回防除(共同、一斉)が有効である。また、粒剤では種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。
- (5) 平成22年に、府内で初めてミナミアオカメムシの発生を確認した。本種は他の斑点米カメムシ類に比べて体が大きく吸汁量が多いため、少数でも被害が大きくなるので注意する。

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1. 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 窒素肥料の多用を避けるほか、露や濡れ葉状態の時にはほ場に入らないなど注意する。

2. ニカメイガ(ニカメイチュウ)

- (1) 府内の一部ほ場で発生を認めている。
- (2) 発蛾最盛期は通常、8月第4半旬である。
- (3) 第1世代幼虫による被害が目立ったほ場、茎の太い品種やモチの作付田では発生しやすい。
- (4) 野菜・チャ・イチジク等の栽培で稲わらを使用する地域では、発生しやすいので注意する。

3. フタオビコヤガ(イネアオムシ)

- (1) 6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。

6. ブドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 本病の発生適温は22～25℃である。雨が多く、気温が低めに経過する冷夏の年は多発しやすい。

7. カキ うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生適温は15～25℃である。8月の高温時には病勢が治まるが、冷夏の年は分生子の飛散が続き、発病が続く。
- (2) 8月下旬頃から発病した葉の裏側には、白い菌そうが見られる。

8. 果樹全般 カメムシ類 (チャバネアオカメシ、クサギカメムシ等)

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 7月下旬頃からは新成虫の発生時期となり密度が高まるので、成虫及び幼虫の寄生や卵塊を見逃さないように、定期的に園内を見回る。
- (2) カキの被害は7月中旬以降に発生することが多い。8月中下旬までに加害された果実の多くは落果する。
- (3) カメムシ類は局地的に発生し被害をもたらすこともあるので、園内外の成虫発生状況をこまめに観察し、発生を認めたら早めに防除すること。特に、山林等の隣接園では注意が必要となる。
- (4) 収穫期が近い果樹は、他の病害虫防除も含めて、農薬の使用にあたっては使用基準(特に収穫前日数)を厳守する。
- (5) 合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類が多発する恐れがあるので避けること。

野菜

1. キュウリ ベと病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温20～25℃で、曇雨天が続くと発生しやすい。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発生が多くなるので、肥培管理に注意する。

2. 野菜全般 ハダニ類 (チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に葉裏に生息し、乾燥条件で発生しやすい。
- (2) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。
- (4) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除を行う。
- (5) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

3. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等ウイルス病を媒介する種もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では、高温乾燥が続くと特に多発しやすいので、注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

4. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA(従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB(別系統)の発生を確認しているので注意する。

5. ネギ シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

6. 野菜全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生は10月下旬頃まで続く。発生量は9月上中旬に最も多くなる。
- (2) 成虫は葉裏に数百個の卵を塊状に産みつける。卵塊は綿毛状のもので覆われ、卵粒は見えにくくなっている。ふ化した幼虫は若齢期(1～2齢)を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透けて見えることから白変葉と呼ばれ、発生初期の目安となる。
- (3) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効力が著しく低下するので、ほ場を見回り白変葉の早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除くとともに、薬剤散布を行い、初期防除に努める。

今後注意すべきその他の病害虫等

野菜

1. タバコガ類（オオタバコガ、タバコガ）

7月第3半旬現在、府内のフェロモントラップへの誘殺数はオオタバコガで平年比やや多く、タバコガで平年並である。これらの害虫は発生が多くなると、大きな被害になるので注意する。特にナス、トマト等の果実に食入すると薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、食入前の防除に留意する。

2. カメムシ類（トマト、ナス、トウガラシ、インゲン、エダマメ等）

周囲に雑草地やダイズなどカメムシ類の発生しやすいほ場があると、被害を受けやすいので、早期発見に努める。

平成22年に府内で初めて発生を確認したミナミアオカメムシは、京田辺市及び亀岡市の予察灯で誘殺を認め、山城地域の水田畦畔で発生を確認している。本種は水稻の斑点米の原因になるとともに、ナス、トマト等の果実を加害するので注意する。